

Newsletter

2013.9.26

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

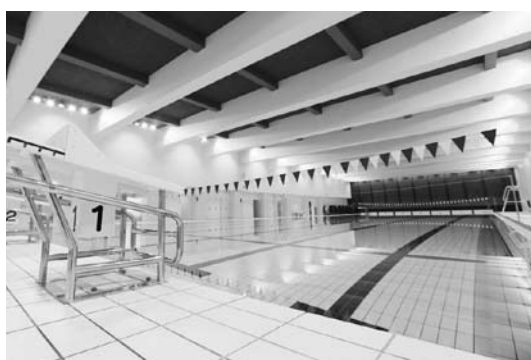
ポール・ラッシュ・アスレティックセンターでの授業が始まって

総合教育科目構想・運営チームメンバー／コミュニティ福祉学部教授 安松 幹展

全学共通カリキュラム（以下、全カリ）におけるスポーツウエルネス教育は、リベラルアーツ教育に根ざした「心身の教養」と「ライフスタイルに応じたスポーツウエルネス実践能力」の獲得を目的としています。この目的に対して、ポール・ラッシュ・アスレティックセンター（以下、PRAC）が果たす役割とその可能性について、述べたいと思います。

1) バリエーション豊富な展開スポーツ種目

ライフスタイルと共にスポーツも多様化していることから、立教大学では従来の伝統的なスポーツ種目に加えて、「太極拳」「野口体操」「クラシック・バレエ」「フロアボール（ユニホック）」「レクリエーションスポーツ」「フラグフットボール」などの種目を展開し、高校までの体育を苦手としていた学生たちにもスポーツウエルネス実践を促す試みを行ってきました。その流れは、PRACの新設によりさらにバリエーションが増え、新たに「ウォーター・エクササイズ」と「クライミング」を加え、ここ2年間、池袋キャンパス整備の関係で展開できなかった「テニス」と「フットサル」が復活し、総計102コマのスポーツ実習科目を展開できるようになりました。



*地下1階 50m プール

2) 授業前後の環境改善

PRACが完成する前のスポーツ施設では、更衣室にシャワーがなく、また広さやロッカーの数が十分整備されていなかったため、授業を行う場所で簡単に更衣を済ませてしまう学生が少なからずいました。PRACでは、地下2階、1階と4階にそれぞれシャワーを伴う十分な広さの更衣室があり、スポーツの授業前後のストレスは大幅に解消されました。PRACで前期に展開する全てのスポーツ実習科目で定員を超える履修希望者がいたことから、学生たちもこのような施設を待望していたことが感じられます。

しかしながら、春先に授業を行う場所にたどり着けず、PRAC内をさまよう学生が続出したことや、屋上における飲水機器の不足など、後期に向けて学習環境のさらなる改善に努めていきたいと考えています。

3) 立教大学生としてのアイデンティティ強化

最後は、PRAC内のエレベータなどでよく聞かれた「立教大学にこんな施設があるなんてすごよね!」「立教大学には、こんな施設があるんだあー」という言葉から感じたことです。立教学院NEWSで白石典義副総長がいわれているように「PRACは、立教大学での学びに自信と誇りを持って社会に巣立つ…学生を育てていくための施設構想が形になったもの」で、その機能が十分備わっていることを再認識させられました。そのFacility（施設）に負けないMentality（授業）を提供していけるように、今後のスポーツウエルネス教育の運営に励んでいきたいと思っています。



*4階 クライミングウォール

目次

ポール・ラッシュ・アスレティックセンターでの授業が始まって	安松幹展／石渡貴之／中村大輔	(1)
領域別科目群を展開して	中島俊克	(3)
新メンバー紹介	山下王世／小泉哲夫／谷野典之／飯島みどり	(4)
言語B副専攻修了者報告	川淵琴	(6)
大学教育学会参加報告	林英明／藤野裕介	(7)
2013年度全学共通カリキュラム運営センター 名簿		(8)

【ボール・ラッシュ・アスレティックセンターでの授業紹介】

2013年度、ボール・ラッシュ・アスレティックセンターでは、19種目102コマを展開している。その中から2種目について授業の様子を紹介する。

トレーニング

コミュニティ福祉学部准教授 石渡 貴之

私は今年度、「スポーツスタディ2〈トレーニング〉」をボール・ラッシュ・アスレティックセンターのトレーニングルームにて行っております。まず新しいトレーニングルームの感想ですが、とても開放的で明るく、トレーニングを行うに当たってのモチベーションが上がります。トレーニングルームを一步出ると、ランニングロードやバランスボールを用いたトレーニングを行える空間が用意されており、総合的なトレーニングを行える場所としてとても良いと思います。さらに17号館1階の時と比べて、トレッドミルやエアロバイクの台数が増加され、トレーニングマシンが充実していることを嬉しく思いました。スクリーンやプロジェクターも常設され、映像資料を用いるなど、バリエーション豊かな授業が大変やりやすくなっております。

私の授業の目標は「健康の維持・増進をベースにパフォーマンスの向上やシェイプアップを目的としたトレーニングのスキルを身につける」としております。すなわち、ただ単にトレーニングを行うだけの授業内容ではなく、トレーニング理論や方法はもちろんのこと、運動処方の内容（運動種類、強度、時間、頻度の設定方法）を解説し、また、健康の維持増進のためには日常生活習慣（睡眠、栄養、飲酒、喫煙など）でどのような取り組みが必要なのかを解説しております。

私の願いとしては、「授業終了後も自らトレーニングルームに通い、継続してトレーニングを行えるようになって欲しい」ということです。そのため、受講生にはまず各自の目標（持久力向上、身体作り、最大筋力向上、シェイプアップなど）を設定させ、個人プログラムを作成させた後、毎回トレーニング表への記入を必須としました。授業の流れは最初に当日のスケジュールを説明した後、1時間は個人プログラムによるトレーニングの実施、そして最後の約20分間は講義またはヨガやバランスボールエクササイズなどのビデオを上映し、一緒にトレーニングを行いました。授業中の血圧や体組成計測（体脂肪率や筋量）は自由とし、トレーニング効果を常に意識できるようにしました。最終的に「私のトレーニング記録」を作成することをレポート課題とし、最終授業時に各自プレゼンテーションをしてもらいました。各自とてもユニークなレポート内容となっており、前期はたくさんの笑顔と満足感で終わることができました。



*地下1階 トレーニングルーム

フットサル

兼任講師 中村 大輔

7月初旬の猛暑が続くある日、「全カリ Newsletter」の執筆依頼を受けました。ご承知の通り今春、ボール・ラッシュ・アスレティックセンター（以下、PRAC）が池袋キャンパスに完成し、池袋キャンパスにおける屋外でのスポーツ種目が“復活”を遂げました。依頼を受けた過日も、高層ビルを横目に見ながら、暑さの中一生懸命走り回り「フットサル」を楽しむ学生と共に授業を行っていた日であったと記憶しています。

「フットサル」の授業はPRAC 5階の人工芝のピッチで行っています。フットサルコート2面分の広さ（テニスコートは3面分確保されている）に約30名の学生が集まり、ボールを蹴る経験がこれまであまりない男女の学生と、フットサルやサッカーにこれまで親しんで来た男女の学生（いわゆる経験者）が共に技術の習得を行い、最後はゲームを行うことが主な授業展開です。授業では、スポーツが本来持つ“プレーする楽しさ”を味わうとともに、全カリの特徴の1つでもある、“学部や学年の枠を超えた人間関係の構築”の双方が達成できるように授業を構成しています。

近年、なでしこJAPAN（サッカー日本女子代表の愛称）の影響を受けてか、そうでないかはわかりませんが、ボールを足で器用に扱うことのできる女子学生の数、以前グラウンド（現在ロイドホール（池袋図書館）が建っている場所）で授業を行っていた頃より増えている気がします。また“ボールを蹴ってみたい”“フットサルをやってみたい”という女子学生の数も、同様に増加している感じを受けます。このような多様な経験を持つ学生同士がどのように一緒にゲームをするの？というご意見もあると思いますが、フットサルの特徴であるコートがサッカーに比べて大幅に狭いこと（授業で使用しているコートは縦29m横18m）や、経験者にプレーの制限（トラップ；ボールを止めることの禁止やゴールポストにボールを当てることができた時のみ得点）をつけることによって、男子学生、女子学生それぞれが、技術を高め、ゲームの楽しさを味わうことが可能になります。

またPRAC 5階の夏の日差しを遮る大きな屋根、高層階ならではの“風の吹き抜け”が、7月の暑い時期においてもフットサルを行うことができる環境をサポートしていると思います。都心の大学では数少ない、非常に充実したスポーツ施設で「フットサル」の授業は行われています。



*5階 フットサル・テニスコート

【領域別 A ／ B 科目検証結果報告】

領域別科目群を展開して

総合教育科目構想・運営チームリーダー／経済学部教授 中島 俊克

全カリ総合では2012年度実施の新カリキュラムで、各学部が他学部生向けに提供する「領域別科目群」として新たに、講義系の「領域別 A」70半期コマ（池袋42、新座28）、文献系の「領域別 B」29半期コマ（池袋21、新座8）を展開した。領域別 A については、全学の授業評価アンケートの対象であるので、その結果の出力を待って2013年度初めに検証を行い、7月4日の全カリ委員会で報告した。領域別 B は授業評価アンケートの対象外なので、2012年度後期の授業が終わった段階で担当教員に対し独自アンケートを実施し、その結果をもとに検証を行って3月21日の全カリ委員会で報告した。領域別 B については近々、受講者に対する独自アンケートも実施する予定であるが、現時点での検証結果を、以下に要約的に提示することとしたい。

講義系の領域別 A 科目は、大きなトラブルもなく、初年度としてはうまくいったと言える。ただ、科目の趣旨が担当者に十分伝わっていなかったケースもあり、授業評価アンケートの所見欄には、受講者の基礎知識が少なく、受講意欲も低いことに驚き、授業計画を途中で組みなおしたという意見が複数あった。自学部以外の学生に講じるのだから、学部の入門講義をそのまま持ってきたのでは、うまくいかないことは明らかである。学生が記した5段階評価でも、全カリ講義系科目の他のカテゴリーと比較して、領域別 A は総じてやや低い数値が出ている。アンケートの回答率自体も高くないことから、履修登録はしたものの講義についていけず、受講継続をあきらめた学生が相当数いたことが想像される。こうした状況は昨年度末の段階である程度感知されていたので、今年度の開講に際し、担当者には科目の趣旨をより明確に伝えるよう努力したが、今後より一層、担当者・学生の双方に情報伝達の徹底を図るとともに、担当者と一体となって科目内容の充実に励みたい。

文献系の領域別 B 科目は、健康上の理由で担当者が途中から交代したケースがあったものの、こちらも概して無事に実施できた。ただ、初年度なので各科目の受講者数に大きなばらつきがあり、こちらが予定していた成果に達しなかった部分があったことは認めなければならない。担当者へのアンケートの結果を要約すると、受講者が少なかったところでは学部のゼミと同様の輪読形式にしてしまった場合が多いようで問題もさほど生じなかったが、40名の定員いっぱい受講者が来てしまったところでは、対応が分かれた。「読む要素を加えた講義科目」と割り切って、大部分教員がしゃべる形式にしてしまったケースが相当数あった一方、あくまで読ませることにこだわった担当者は、グループ制を採用するなど、運営に苦労した。そうした中で、一部の若手担当者が、情報機器をうまく使うことで受講者の読書意欲を引き出すのに成功しているのは心強い。そうした経験を共有することで、この新しい科目カテゴリーも徐々に質を高めていくことができると信じている。

2012年度以後の入学者は、この領域別科目群に「立教科目群」を加えたグループの中から6単位を卒業までに履修しなければならないことになっている。こうした卒業要件単位の「縛り」と、抽選登録制度とが、必ずしも受講意欲の高くない学生を生み出す原因になっているとすれば、2016年度に向けたカリキュラム改革に際しても、何らかの工夫が求められよう。しかし見方を変えれば、このように半ば強制的に自分の専門外の領域に学生の目を向けさせ、視野の広い人間を養成することこそが、全カリの教育の狙いであるともいえる。専門教育の厳しさとの兼ね合いがあるので、この点を過度に強調することは、我々としては控えねばならないが、専門教育の高度化によって学生が視野狭窄に陥るのは避けるべきであるという点については、大方の合意が得られるのではないかと考えている。いずれにせよ、この試験的科目カテゴリーの一層の充実を今後も図っていきたい。

領域別 A ／ B 科目紹介・概要

領域別科目群は、各学部から提供される科目の集合であり、それぞれの学部の特徴を持つ科目群である。学生が、4年間で自分の専門以外のさまざまな学問分野に触れ、異質な思考法や問題意識を身につけることを目的としており、各科目の提供学部に所属している学生は履修できないことも特徴である。

領域別 A（講義系）

提供学部以外の学生も共有すべき課題等について、その学部の基本的な学問内容を支柱にして行われる講義形式の科目群である。

例）キリスト教学への招待、文学への招待、経済学の基礎、物理学入門、政治の諸相、心身コンディショニング、等

領域別 B（文献系）

自分の専門以外の文献を能動的に読み込むことで、学生が異質な思考回路やその思索の成果に触れ、知的視野を広げることを目的としている。

例）教育を読む、社会学を読む、言語研究・言語教育研究レビュー、観光の捉え方、映像と身体について考える、等

【新メンバー紹介】

就任のご挨拶

総合教育科目構想・運営チームメンバー／文学部准教授 山下 王世

本年から全学共通カリキュラム総合構想・運営チームメンバーとなりました文学部の山下王世です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

立教大学に着任して5年目となります。昨年度までの2年間、文学部史学科の教務委員を担当し、専門教育カリキュラムについては多少なりとも理解を得られるようになってきたところです。今年からは全学共通カリキュラムを担当することになり、今は全カリの構成について勉強中です。毎回のチームミーティングでは、全カリのしくみを理解するのに精一杯ですが、経験豊富な諸先生方と優秀なスタッフの皆様にお教えいただきながら、まずは初年度前期をなんとか終了しつつあります。

私事で恐縮ですが、私は大学時代を海外で過ごしました。建築学を学んだ学部時代のカリキュラムは、その9割が必修の専門教育科目で構成され、残る1割の教養科目も1科目を除き8学期間（4年間）を通して内容が限定されていました。大学卒業資格が建築家資格になる大学でしたので、カリキュラムが窮屈になるのはある程度は仕方のないことだったかと思います。しかし建築学では、設計、工法、材料、構造、歴史等の専門知識を習得することと同様に、デザインを支える思考の源となる、文系理系を超えた様々な教養を身につけることも大切です。その意味で、もう少し教養科目が充実していたらと思ったものでした。そのような学部時代を送った私には、立教大学の全学共通カリキュラムは至れり尽くせりで大変豊かに見えます。私の出身大学にも立教大学の全カリのようなプログラムがあったのなら、大学での学びはさらに充実したことだろうと思うのです。

一方、今、教員という立場で全学共通カリキュラムの授業を担当しておりますと、別の側面が見えてきます。全カリ科目では、さまざまな学部・学年の学生と一緒に履修するため、授業運営にはきめ細やかな目配りが必要と感じています。教員としての力量が問われる、ある意味ではかなり骨の折れる授業科目であるように思います。私は教員としてもまだ駆け出しですので、授業評価アンケートや学生からのコメントペーパーを読みつつ、日々、精進を重ねております。そのような状況ですので、私が全カリ総合構想・運営チームで貢献できることはあるのだろうかと思うこともしばしばですが、自分が大学生の頃に感じた、専門を深めるためにもっと教養科目を学びたかったという想いと、現在、駆け出し教員として現場で感じとる皮膚感覚とを足がかりに、チームに貢献して参りたいと思っています。何卒よろしくお願い申し上げます。

久しぶりの復活

総合教育科目構想・運営チームメンバー／理学部教授 小泉 哲夫

このたび全カリ総合構想・運営チームメンバーになりました理学部の小泉です。全カリ総合には、学部選出の委員として参加したことがあり、また2004年度には特別教務委員として「多彩な科目」（立教科目の前身のひとつ）の検討に参加しておりますので、8～9年ぶりの復活ということになります。

前回、全カリ総合にかかわったころは全学部から運営委員が出ており、全カリは全学部で担うという全カリ発足当時の理念がかなり強く残っている時期でした（全専任教員がそういう意識でいたかはかなり疑問符がつきますが）。その後、大きな組織改革があり、現在の総合チームは中島チームリーダーのもと5人の少数精鋭（？）メンバーで運営しています。私はとても精鋭メンバーとはいえませんが、出来る限りの協力をさせていただきます。

正直に言いますと、組織改革が行われてから、全カリで行われていることが我々一般の教員からは見えにくくなったという感想を持っています。12年度のカリキュラム改革についても、実際はいろいろな議論があったのですが、いきなり大きな変更が上から降ってきたという印象が拭えませんでした。今回は総合教育の改革を推進するという立場になりますので、学部の教員とのコミュニケーションを良くして議論を進めていきたいと思っています。

前期は2週間に1回のミーティングで、議論の中身も事務的なものが多く、ゆったりとした雰囲気役を終えることができました。後期からは16年度のカリキュラム改革の議論も始まるということですので、気を引き締めてのぞみたいと考えています。よろしくお願いします。

こんな時代の中国語

中国語教育研究室主任／異文化コミュニケーション学部教授 谷野 典之

今年度、中国語教育研究室主任となりました異文化コミュニケーション学部の谷野典之です。全カリでは2007年度から2010年度まで言語教育科目構想・運営チームリーダーを拝命し、必修英語6単位、言語B4単位化と言語副専攻制度を軸とするいわゆる2010年カリキュラムの策定のために大わらわの日々を送りました。その後一年間の研究休暇を台湾で過ごし、さらに一年間研究室員として平穏な日々を送った後、こうして全カリに舞い戻ってきました。

大学における中国語科目というのは、その時々の日中関係を鏡のように映し出すという意味で、極めて特殊な政治的

な言語であるように思います。日中関係が順調だと、中国語履修希望者が増え、逆に昨今のように両国の間がぎくしゃくすると、とたんに履修希望者が減少します。こんな言語はほかにありません。

立教大学で言語Bとして選択できる言語は中国語のほかドイツ語、フランス語、スペイン語、朝鮮語があります（文学部のみこれ以外にロシア語が選択可）。こうした言語には中国語のような政治性はないのですが、中国語の履修希望者が増減すると、いわばそのとばっちりを受けて各言語の履修希望者が増減します。特に今年度は、数年来くすぶっていた日中間の領土問題が影響して、中国語履修希望者が激減しました。そのことによって、他の言語のクラス人数が少しずつ増えるという結果を生みました。これはもちろん誰の咎でもないのですが、当事者として、なんとはなしに申し訳ない気持ちになります。

中国は今の日本にとって心理的距離の遠い国になっているのかも知れません。しかし、かりにそうだととしても、日本にとっての中国は無視したり軽視したりできる存在ではありませんし、中国語を学ぶ意味も、それによって薄まったりなくなったりするものではありません。

日本政府観光局（JNTO）のまとめた「2012年 国籍別 / 目的別 訪日外客数」を見てみましょう。昨年、日本を訪れた外国人のうちアジアからの訪問者が全体の76.4%を占めています。さらにその内訳のうち上位4カ国（地域）を見ると、韓国がトップ。続いて中国、台湾、香港と並びます。中国、台湾、香港は言語としては中国語（標準中国語）が通用する地域ですから、人数で見ると合計337万人あまり、訪日外国人全体の40.4%が中国語を話す人たちだったことになります。

中国は海外旅行の急成長期にあって、日本ばかりでなく世界各国で中国人観光客の姿が目立つようになりました。中国語は、中国という地域のローカルな言語から、日本で最も多く耳にする外国語と言っても過言ではないような時代になってきています。心理的に遠いつもりでいても、日本と中国とは離れがたく結びついています。

その意味でも、2010年度からスタートした言語副専攻制度を利用して中国語をレベルアップし、言語副専攻を修了する人たちが増えているのは、実にうれしいことです。国際交流基金の「海外日本語教育機関調査」の2012年速報値によれば、海外における日本語学習者数では中国が一位でした。互いの言語を学び合うことで、両国の若い世代がより一層理解を深めていくことに期待したいと思います。

	訪日者数(人)	比率(%)
総数	8,358,105	100.0%
アジア	6,387,977	76.4%
韓国	2,042,775	} 40.4%
中国	1,425,100	
台湾	1,465,753	
香港	481,665	
北アメリカ	876,401	10.5%
ヨーロッパ	775,840	9.3%
その他	317,887	3.8%

《自己紹介》

スペイン語教育研究室主任／異文化コミュニケーション学部准教授 飯島 みどり

4月末、釜山に招かれ東アジアのラテンアメリカ研究者と交流する機会を得た。

団体旅行の苦手な筆者は、自らの縄張りであるラテンアメリカ現地へ出かけても、もっぱら単独行。現地の友人と同道することはあっても「研究者仲間」に会うことはまずしない。「ここでなければ会えない相手」以外に時間を割く余裕がないからである。

一方、ラテンアメリカ現地においても20年前とは異なる位相でKorean/Chineseの存在は重くなり、あちらの大統領たちはBeijingやSeoulに飛ぶことはあれ、もはやTokioは素通りされても不思議はない。にもかかわらず、東アジアのラテンアメリカ研究者には当方これまでほとんど出会うことがなかった。

さてそこに釜山である。同業者たちとはまずは（スペイン語で）自己紹介に勤しむ。ここでおや、と感心する手法に遭遇した。もちろん名刺をやりとりするのだが、韓国の同業者たちは最近すっかり名前もハングル表記。たとえアルファベット併記でも、金浦空港がなぜGimpoになるのか切り替えに四苦八苦したことのある身からすると、さっぱり安心できない。大体、韓流スターの名も漢字表記なら一発で記憶できるのに、カタカナ書きが主流になって以来、誰が誰やら混乱しがちなのは筆者だけだろうか。総ハングル化の事情はわからぬでもないが、80年代ならそれなりに読めていた新聞を、今は暗号解読の気分で眺めるしかない。

ところが何としたことか、彼らはひとりひとり皆「源氏名」を持っていた。つまりラテンアメリカ現地でこそ自分の名を浸透させるに大いに困るのであるから、相手の記憶に残りやすいようカルロスとかトマスとかカルデスといった通称を用意しているのである。先手必勝。おかげで「漢字でないと頭に入らない」こちらも、何人かの李さんや金さんを無理なく区別することができた。キリスト教徒としての洗礼名をそのまま流用したり、吉林や台中からの参加者も同様の手を用いていることに、同業者の準備のよさを見た。

タイムズ・スクエアを飾ったことのあるリキュールの御利益か、筆者の名はスペイン語／ポルトガル語話者にはさして無理なく受容される。しかし一般にKの文字の頻出する日本語名は彼らには敷居が高い。東アジアの同業者たちは自己紹介の要というものをしっかり心得ている。

そう、固有名詞は馬鹿にできない。文法の影響などさらさら受けないように見える固有名詞にも、実は大いなる言語障壁が横たわっている。固有名詞を蓄えられるかどうかは当該言語への慣れ具合に懸かっている。固有名詞を強力な武器としてその言語に深く分け入ることも可能なのである。

翻って昨今の教室では、歴史教育どころか地理教育もおざなりにされているのではないか、不安が尽きない。いくら「文法」に挑んでも、固有名詞を捕捉できなければ話題についてゆけない。スペイン語教育研究室としては、固有名詞（人名・地名）認知能力育成の必要性を痛切に感じている。

【言語B副専攻修了者報告】

中国語副専攻を修了して

文学部4年次 川淵 琴

私は、中学生の頃から中国語に興味があり、大学生になったら中国語をマスターしたいと思っていましたが、中国語副専攻を履修することにした動機には、1年次の中国語担当の先生にかけていただいた言葉が大きく関わっています。1年間の必修の授業が終わる際、先生が一人一人と面談してお話を下さったのですが、その時私は、「これからずっと中国語の勉強を続けていって」という言葉をかけていただきました。1年間自分なりに頑張ってきた、その努力を認めていただけたような気がしました。同じ頃に、言語副専攻の制度があることも知ったので、言語副専攻修了認定を受けることを次の目標とすることに決めたのです。

私が履修したものは、2年次の「中国語中級1・2」、3年次の「上級中国語ライティング1・2」「上級中国語演習1・2」、それに加えて関連科目の「中国語圏の文化」「中国語圏の社会」です。必修の頃から変わらず、週2回のペースで中国語の授業を受けたことになります。中国語はゼロからのスタートだったので、専門の勉強をしながら週2回というのは、正直、楽なものではありませんでした。特に「中国語中級1・2」は、1年次の必修の授業に比べて一気に内容が難しくなり、それに加えて、課題もとても多く、苦戦したことを覚えています。しかし、その1年間でしっかり文法を学び直したおかげで、私の中で中国語の基礎となる土台の部分が固まったようで、それは、その後の「上級中国語ライティング1・2」「上級中国語演習1・2」に非常に役立ちました。「上級中国語ライティング1・2」は、日本語を話さないネイティブの先生が担当で、受講者も留学経験者などレベルの高い人が多く、最初は授業についていけるかどうか不安でしたが、徐々に自分の力で作文が書けるようになり、中国語の力がどんどんついていくことを感じられる授業でした。自分自身の言葉で書くという作業は、文法を理解することとはまた段階の違う話だと思うので、この授業によって私の中国語の力は、次のステップに進めたように思います。「上級中国語演習1・2」は、他の授業とは若干毛色が異なり、論説体中国語を学ぶものです。新聞記事をどんどん読んで、いわゆる書き言葉というものを身につけていきます。漢字ばかりが羅列した新聞記事を最初に見た時は、これが読めるようになるとは到底思えませんでした。たくさんの素材に触れることで中国語にもだんだん慣れていきました。この授業が私の性に合っていたこともあり、1年経つ頃には、読み取り能力は飛躍的に進歩しました。

私は、言語副専攻修了認定を受けた今でも中国語の学習を継続しています。私の学科では、ゼミがなく卒論も必修ではないため、周囲には「大学の4年間で何を学んだのかよく分からない」とこぼす人が多くいます。そんな中で、私には中国語があると思えることは、とても強みになっています。1年生の時に先生にかけていただいた言葉を胸に、これからも努力を続けていきたいと思っています。

科目名(タイトル)	上級中国語演習2
担当者(フリガナ)	三瀧 正道 (ミツマ マサミチ)
学期／単位数	後期／2単位
備 考	抽選登録科目 定員30名 副専攻コア科目／インテンシブコースコア科目

■授業の目標

新聞記事を読みこなす能力を身につける。

■授業の内容

実際の記事を多読しながら、現代中国の諸問題を考察する。

■授業計画

毎回、三瀧が最新のニュース記事を用意し、その講読を通して、現代中国理解を進める。
更に、テキストを通して現代中国に関する体系的な理解を深める授業も行う。

■成績評価方法・基準

平常点(60%)＋期末テスト(40%)

■テキスト

三瀧正道他『現代中国の軌跡』(金星堂 2007年 2,500円＋税)

■参考文献

■準備学習・その他(HP等)

自宅学習の課題は毎回の授業で指示する。

*言語副専攻コア科目シラバス一例(2012年度開講科目)

《言語副専攻(言語B)カリキュラム》

ドイツ語 フランス語 スペイン語 中国語 朝鮮語	スキル科目	必修科目（4単位）		自由科目 言語副専攻（スキル科目 12 単位＋関連科目 4 単位＝ 16 単位）			
		1 年次		2～4 年次			
		～語基礎 1	～語基礎 2	言語副専攻基礎科目（4 単位）		言語副専攻コア科目（8 単位）	
				～語中級 1	～語中級 2	上級～語コミュニケーション1 上級～語ライティング1	上級～語コミュニケーション2 上級～語ライティング2
				～語スタンダード1	～語スタンダード3	上級～語リスニング・リーディング1	上級～語リスニング・リーディング2
				～語スタンダード2	～語スタンダード4	上級～語演習 1	上級～語演習 2
		～語海外言語文化研修（中級）			～語海外言語文化研修（上級）		
	関連科目	～語圏の文化、～語圏の社会、言語情報処理論（～語）、学部展開科目					

*原則として必修科目修了後に言語副専攻に進む。また、基礎科目修了後にコア科目に進む。

【大学教育学会第35回大会参加報告】

教育から学習への転換期における熱気の中で

教務部全学共通カリキュラム事務室 林 英明

2012年度の中央教育審議会答申などに見られるように、将来の予測が困難な時代における大学にとって、「学生を教育する」ことから「学生を主体的に学習させる」ための学士課程教育の質的転換がキー・イシューとなっている。

今回参加した大学教育学会第35回大会では、「教育から学習への転換」がテーマとなっており、転換期を迎えた大学教育のあり方について、様々な実践研究を交えた発表や意見交換が行われ、貴重な情報収集の機会となった。本報告では、特に「目からウロコ」であった基調講演と公開シンポジウムの内容について報告したい。

本学会の基調講演者は、米国から来日した高等教育コンサルタントのディー・フィンク博士であった。講演のテーマは「意義ある学習を目指す授業設計」であり、教育中心から学習中心となった大学教育のパラダイムシフトによって、授業を通じて学生に質の高い学習体験を行うことが教育者としての大学教員の新たな課題であるとし、日本国内においても研究途上である授業設計のあり方について論じられた。印象的であったのが、フィンク氏いわく15回の授業回数の中で1回でもアクティブ・ラーニングの要素を取り入れることによって学習成果が大幅に改善した事例もあるとのことで、講演参加者からは驚きとともに「安心した」との声も聞かれた。

基調講演の後、引き続いて実施された公開シンポジウムでは、京都大学高等教育研究開発推進センターの松下佳代教授より、カリキュラムの観点から「教育から学習への転換」が報告され、欧州におけるTuningプロジェクトなど国境を越えたカリキュラムの体系化への取り組みが紹介された。一方で2012年度より顕著になったMOOC (Massive Open Online Course) と呼ばれるWeb上の講義システムにより、教育のオープン化が図られていることも紹介され、MOOCの普及によって、質保証の単位が大学や部局等が提供するカリキュラム単位から、個々の教員が提供する個別の授業科目単位となり、むしろカリキュラムを解体する力が働いているという報告が印象的であった。

その後のパネルディスカッションでは、フィンク氏より「Flipped Classroom」が紹介された。直訳すると「反転授業」だが、「Flipped Classroom」では一般的な授業の進行方法とは逆で、先述のMOOCのようなWeb上のコンテンツを講義として自宅で学習させ、実際の授業では応用的な議論を中心に行う。学生は自宅学習を行わないと授業についていけないので自宅学習の時間も増え、授業への出席率も改善する事例もあるという。テクノロジーの進化によって、大学の授業を大きく変える可能性を秘めた好事例であると感じた。

このように本学会では「教育から学習への転換」へ向けて、転換期にふさわしい活況と熱気を感じられた。フィンク氏によるとFDの活発な米国においてもファカルティ・ディベロッパーは35%程度の大学にしか普及していないとのことで、こうした環境を改善し、個々の教員へのさらなる関与が必要であるとのことであった。教育から学習への転換のためには、カリキュラム改革や個々の授業改善、FD活動の環境整備など多面的な取り組みが今後ますます重要になることを確認した次第である。

熱気薫る、初夏の仙台

教務部全学共通カリキュラム事務室 藤野 裕介

去る6月1日(土)、2日(日)、東北大学川内北キャンパスを舞台として、大学教育学会第35回大会が開催された。今回、筆者が事例報告として関わりを持ったラウンドテーブルの紹介を始め、熱気を帯びた2日間の様子をレポートする。

「職員から見た教養教育カリキュラム・マネジメントー 作成・維持・検証ー」をテーマとしたラウンドテーブル(企画代表: 佐々木一也本学文学部教授)では、「カリキュラム・マネジメントにおける教職協働の実態を明らかにし、教員と職員が大学人として一体となってカリキュラムを運営するために必要な人的および制度的条件を明らかにする」ことを趣旨としている。筆者はこのラウンドテーブルにおいて、全カリでの教職協働の実態を、2012年度総合新カリキュラム編成過程を主な素材として、事例紹介的に披露した。フロアからは、全カリの科目内容やそのマネジメントについて関心の声が聞かれ、カリキュラムの中身もさることながら、特に組織として全学レベルでマネジメントを進める策について興味を喚起したように思う。わずかではあるが、立教流教職協働のエッセンスを感じてもらえればと願いつつ、報告を締めくくった。

本ラウンドテーブルでは、さらに2件の事例紹介として青山学院大学、北九州市立大学から報告があり、その後、教員、職員それぞれの立場を超えた議論をフロアと一体的に行った。さまざまな視点から大学教育について議論を交錯させる姿は、まさに大学人を感じさせるものであった。今秋開催される同学会課題研究集会シンポジウムでは、テーマに対する最終提言がなされる予定であり、個人的にも、引き続き関心を持ち続けたいと思っている。

今回35回大会を数える大学教育学会は、旧一般教育学会を継承しており、現在は広く大学教育に関わる話題を取り上げて活動している。初日のラウンドテーブルでは、例えば「グローバルな人材育成に向けたキャリア教育の質保証とライティング指導力」、「学生支援担当職員のキャリア・パスと求められる能力」、2日目の自由研究発表では、「教職員能力開発」、「教育方法・授業改善」など、高等教育が抱えるバラエティ豊かなテーマが目玉を引く。各会場に足を踏み入ると発表者の熱のこもった弁が耳に届き、高等教育の課題を、各々が自由に先進性を持ちながら語っているような感覚を覚える。このリベラルな空気感もまた、大学教育学会の魅力なのかもしれない。

さて、今回の学会出張は、私ども全カリ事務室から職員3名が参加して見聞を深めた。学会終了後は牛タンを食し、アルコールの力も借りた3人衆の熱気薫る議論は、あたかも学会での弁を彷彿させるかのように延々と続いた。メのラーメンでも締まらなかった我々の自由な大学論が、今後も続くことを願いたい。

2013 年度 全学共通カリキュラム運営センター 名簿

2013 年 9 月現在

〈全カリ委員会〉

役職名	氏 名	所属	
部 長	青木 康	文 史	
副部長	菅沼 隆	済 経政	
チーム リーダー	新野 守広	異 異	言語チーム
	中島 俊克	済 済	総合チーム
運営センター 委員	沖森 卓也	文 文	文学部長
	郭 洋春	済 済	経済学部長
	家城 和夫	理 物	理学部長
	奥村 隆	社 社	社会学部長
	佐々木 卓也	法 政	法学部長
	村上 和夫	観 交	観光学部長
	松尾 哲矢	福 ス	コミュニティ福祉学部長
	松井 泰則	営 国	経営学部長
	堀 耕治	現 心	現代心理学部長
	池田 伸子	異 異	異文化コミュニケーション学部長
	松本 康	社 社	教務部長

〈言語教育研究室〉

研究室名		氏 名	所属
英 語	主任	森 聡美	異 異
		Allum, Paul H. <small>後期から</small>	異 異
		Caprio, Mark E. <small>前期まで</small>	異 異
		Cousins, Steven E.	異 異
		Cunningham, Paul A.	異 異
		藤田 保	異 異
		河合 優子	異 異
		川崎 晶子	異 異
		Martin, Ron	異 異
		師岡 淳也	異 異
		灘光 洋子	異 異
		佐竹 晶子	異 異
		高橋 里美	異 異
		高山 一郎	異 異
		武田 珂代子	異 異
		鳥飼 慎一郎	異 異
		山田 久美子	異 異
		山口 まり子	異 異
ドイツ語	主任	浜崎 桂子	異 異
		新野 守広	異 異
フランス語	主任	小倉 和子	異 異
		石川 文也	異 異
スペイン語	主任	中川 理	異 異
		飯島 みどり	異 異

〈総合チームサポーター〉

	氏 名	所属	サポート グループ	*1
学部選出	河野 哲也	文 教	人文学	
	荒川 章義	済 済	社会科学	
	上田 恵介	理 生命	自然・情報	
	橋本 晃	社 メ社	社会科学	
	林 美月子	法 法	社会科学	
	豊田 三佳	観 交	社会科学	
	長倉 真寿美	福 福	社会科学	
	秋野 晶二	営 営	社会科学	
	日高 聡太	現 心	スポーツ人間	
	星野 宏美	異 異	人文学	
総長任命	長島 忍	理 数	自然・情報	
	石坂 浩一	異 異	社会科学	
	沼澤 秀雄	福 ス	スポーツ人間	
	Davis, Scott T.	営 国	社会科学	
	松田 正隆	現 映	人文学	
	細井 尚子	異 異	人文学	

*1 サポートグループ
 人文学系サポートグループ
 社会科学系サポートグループ
 自然・情報科学系サポートグループ
 スポーツ人間科学系サポートグループ

〈言語教育科目構想・運営チーム〉

役職名	氏 名	所属	
リーダー	新野 守広	異 異	
メンバー	森 聡美	異 異	英語教育研究室主任
	浜崎 桂子	異 異	ドイツ語教育研究室主任
	小倉 和子	異 異	フランス語教育研究室主任
	飯島 みどり	異 異	スペイン語教育研究室主任
	谷野 典之	異 異	中国語教育研究室主任
	石坂 浩一	異 異	諸言語教育研究室主任

中国語	主任	谷野 典之	異 異
		細井 尚子	異 異
諸言語	主任	石坂 浩一	異 異
		イ ヒャンジン	異 異
		新野 守広	異 異

*2 言語チームリーダーとの兼務

〈総合教育科目構想・運営チーム〉

役職名	氏 名	所属	
リーダー	中島 俊克	済 済	
メンバー	山下 王世	文 史	
	溜箭 将之	法 国ビ	
	西山 志保	社 社	
	安松 幹展	福 ス	
	小泉 哲夫	理 物	

全カリシンポジウム開催のご案内

「知のコラボレーション～主題別Bの魅力～」

日時：2013 年 10 月 17 日（木）18：30～20：30

場所：太刀川記念館3階多目的ホール

2012 年度から装いを新たにスタートした全カリ総合教育科目の一翼を担う「主題別B科目」を、その前身である“総合B”時代からひも解く。学生から見た魅力、教員の視点からの魅力に切り込み、また、新しい学びのスタイルとも関連付けながら、主題別Bの未来を考える。

全カリニュースレター No.34

印刷 2013. 9. 18
 発行 2013. 9. 26
 発行人 青木 康
 編集人 中川 理、中島 俊克
 発行所 立教大学
 全学共通カリキュラム運営センター
 印刷 株式会社 白峰社